

父母は喜んでいた。「神に祈っていただけのことがあった」と思っていたのだと思う。

現在、一番上の姉は八十七歳で元気でいる。皆と交わらなければボケるといって、一日置きに踊りに行っている。長兄は大正元年生まれ、健在。兄弟のうち五人は健在である。戦争犠牲者の多い中、父母の祈りのお陰か、全員無事生還でき、現在までの幸せを感謝している日々である。

歩兵第百二十連隊

中支作戦に生還して

福井県 柏谷 富二雄

私は大正八年二月一日生まれ。昭和十六年十二月八日、対米への宣戦布告により太平洋戦争（大東亜戦争）に突入したため、学徒動員第一回のいわゆる「繰り上げ卒業」により、昭和十六年十二月、明治大学商学部を卒業した。本来なら、十七年三月卒業であったが、

卒業と同時に私は南満州鉄道（満鉄）の傍系会社S社に入社、一カ月間東京支社に勤務し、社員として在籍のまま二月一日、福井県鯖江の歩兵第三十六連隊に入営した。しかし、このS社は日本の敗戦により日本政府指定閉鎖機関となり、終戦後間もなく自然消滅し、現存していない。

入隊の経緯と、初年兵当時の軍隊生活及び

外地転属後の状況

第一乙種合格、幹部候補生要員として鯖江第三十六連隊歩兵砲中隊（藤岡隊）に入隊し、同期新入隊員は五〇名くらいだった。三カ月の短期教育期間も終わり、各々幹部要員甲、乙種に分かれ、三人ばかり兵として残留したが、そのうちの一人として、動作が目立つた。換言すれば原隊内も日本軍隊の末期的現象を露呈していた。内心早く原隊から脱出できないかと考えていたが、四月になって新入隊員が入隊し、六月になって中支に出征するということで、私も首尾よくこれに編入され、便乗して野戦に赴くことになった。

当時の人事係、准尉栗城栄氏も一緒だった。

昭和十七年七月、鯖江駅を出発、広島経由、宇品港を輸送船で中支安慶に向け出港した。七月二十二日だった。盛夏でわれわれの起居する船倉のむしろも汗で噎せ返り腐っていた。船内でも甲板上に衛生所が設けられていた。東シナ海航行二日目に、船酔いが出始め混雑したが海のいろが泥にこりを見せるころ、すでに船は揚子江河口の上海に近づいていたのである。

私に対する不可解なリンチは船倉へのデッキ上で再び出くわした。氏名不祥の某下士官軍曹だった。「この注意人物」とデッキ上の上がり下がりのすれ違いにおいて私の顔を痛打した、唇を血で染めたがその後上陸してからは会うことはなかった。恐らく初年兵一行を第一二〇連隊へ届けるための随伴要員の一人でなかったかと思われるが判然としない。現在、福井の町でそれらしき風貌の人と出会うとき、その節のことを思い出すのが常である。

鯖江の原隊で

幹候要員一期の演習中、班付き上等兵から鉄棒で背

後からやられ頭を割られて負傷した。彼は自分の誤りを上司には私の誤りとして隠していたので、彼は宮倉入りを免れ、助けられた。「お前の顔は陸軍大将の顔だ、どうみても」など訳の分からぬことで制裁を掛けた古兵ども。彼らの不当制裁に反発して翌日の私への古兵どもの集団制裁は原隊・藤岡隊内でも問題になり、表面化の寸前ともなった。

こんなこともあった。師団長検閲で連隊長以下出迎えの隊列整然たる中に、師団長出迎えのラッパが奏されるや、ラッパの音に驚き勇んで私の持ち駒「枋風号」が放馬して緊張の中を私が走り回って兵舎裏で取り押さえ、師団長はあの馬の御者はだれかと私の名前を聞いたそうである。

このようなナンセンスの累積事實は、大陸接近の予知と共に消滅し、船は魚雷の攻撃も受けず、呉淞港灯台を左に見て上海を余所に揚子江を徐行進入していた。いつの間にか輸送船の周囲に数隻のジャンクが随伴し、ジャンクを操る人も異国人、姑娘クイニョである。初めて見る支那大陸風土、風姿にいよいよ無事に野戦地に到着

した解放感に胸を撫で下ろした。

濁流はますます濃くなっていた。泥色の流れである。こんな流れに魚が住めることかと思われるくらいだ。

それがいるのだ。日本人の想像もおよばぬ大魚である。スゲ笠冠の便衣の男が、天秤棒をかつき威勢よく遙か彼方の江岸の台上を歩いて行くのが点綴している。揚子江の人間の半身大の魚を、ランス（藍子）に入れて運んで行く所であろうか、立木一本もない渺々たる背景に浮かぶ点景である。

輸送船は揚子江を河口上海から遡ること昼夜三日目に錨を下ろした。やっと目的地安慶についた。七月三十日であった。内地の宇品港を出発して以来一週間余りである。支那（現在の中華人民共和国）安徽省安慶である。いよいよ下船、支那大陸上陸第一歩が始まった。暑熱の炎天下をわれわれ一行は安慶軍官学校まで行軍し大休止した。沸騰させた湯でのどを潤し（生水は厳禁）、大陸の大气を満喫した。道すがら見るものに映るものすべて珍しい奇異の風景である。婦人の纏足、家屋の土間、支那服を着た男女の往来、一輪車

を押す苦力（人夫）、その軋る音、世帯道具一切を藍子に入れて秤子（天秤棒）でかついで足早に行くなど、支那特有の異国情緒である。時々その人影を縫うように日本将校の乗った人力車が往来する。公用の白腕章をつけた下士官が通る。日本軍占領下の安慶であることが如実にわかる。

安慶には当時師団司令部があったと聞く。安慶の市街は揚子江岸からちよつと高台に展開する。輸送船からハシケで下り、坂道をしばらく上って右へ回って歩いて二〇分くらいのところ軍官学校があった。

そこでの大休止も終わり、昼食後、いよいよ駐屯地向け出発である。しかしここで初年兵受領の申し込み、申し受けが完了していた。ここでの強い印象は、軍官学校門前に向かって左へちよつと行った所に井戸があった。この井戸の傍らで仰向けになって炊事場から汲んできた熱湯を少しづつ水筒に五、六杯も飲み干したことを覚えている。それほど喉が渴いて渴いて仕方なかった。私一人が古年兵だったから、まだ隊員間に戦友として語る者もできていなかった。

揚子江岸から舟艇に乗せられ一行は安慶から上流へと遡る。揚子江岸を左右に眺めながら、数時間後着岸し、再び上陸したところが東流であった。午後三時ころだったと思われる。僻地の寒村である。船を下りて直ぐ向かって右側にしだれ柳があり、その面前には江岸衛兵所があった。しだれ柳の下には姑娘が立っていた。われわれ一同の上陸をしきりと見詰めていた情景は今もって忘れられない。

江岸衛兵所の「敬礼」の号令が耳に入ってくる。隊列の先頭の將校に対する儀礼である。われわれはやがてこの衛兵所前を通過し、石畳の小路を真っ直ぐ行って左へ折れて営門に入って行った。再び衛兵所の前を通りすぐ右手にバラック建て一棟、その奥に六畳敷きくらいの室の独立小屋があった。中隊長、陸軍中尉岡田薫殿の使用である。バラック建ては兵舎で、間口三間、奥行き二〇間もあったかと思われる。兵隊の居所は床の上にアンペラが敷かれていた。小隊長は陸軍少尉長井忠衛殿であった。

この日から、私の嵐第六二二部隊歩兵砲中隊（第

百十六師団歩兵第二百二十連隊歩兵砲中隊）での戦務が始まった。私が初年兵として教育を受けているころ、米軍機による第一回目の本土空襲があり、その航空機は中国大陸に着陸した。そのため浙贛（浙は浙江省、贛は江西省）作戦により中国軍飛行場を覆滅するため、嵐兵団は同作戦に参加し、師団主力は九月三十日、安慶付近に復帰したといわれている。ちょうどわれわれが、歩兵第二百二十連隊に到着した時期であったと、後に先輩から聞かされたのである。

その後、連隊は昭和十七年十二月、大別山作戦参加、十八年七月常德作戦、十九年四月湘桂作戦、二十年四月、湖西（洞庭湖西方、芷江）作戦と続いたのである。この作戦でわが兵団、わが連隊は多大の犠牲者を出しているのである。この諸作戦については多くの人々が戦史・戦記に記述したり、戦友の多くの戦友会での語り草であるので、私は終戦前後の宝慶付近（湖南省衡陽西方）での状況について申し述べることにします。

私はその芷江作戦に連隊砲中隊の一兵卒として戦い、

その戦況から見て戦死を予感しながら撤退して敵と離脱したのであるが、九死に一生を得て旧駐屯地宝慶へ帰着し、追撃する敵に備え陣地構築工作中であり、毎日のごとく敵機の空爆、銃撃に悩まされていた。この戦闘では多数の上官や戦友を失い、自らも故郷への生還は不能であろうと覚悟していた。

そのころ宝慶において敗戦の詔勅を受けたのである。昭和二十年八月、われわれ歩兵第百二十連隊砲中隊は、中国湖南省衡陽郊外宝慶の一部落にあった。芷江作戦が峨峨たる山岳に阻まれ、飛行機の来襲で昼間は行動できないまでに釘付けされた。従ってその作戦行動は思い任せず、反転して原兵站地宝慶に戻り、敵襲あるものとの予想の下に、砲阵地構築の命令が下っていた。歩兵砲が兵站にあって陣地構築し、裏山に砲を常備据え置くことは異例のことである。それほど切迫していたのである。

兵隊も新規入隊してきたけれども、いずれも朝鮮人の日本帰化人である。朝鮮国の国籍を有する若者で、金さんという人と、もう一人劉さんとかいう人だった

と記憶する。この二人が指揮班に配属になってきた。

私も通訳（中国語）という任務もあったので、指揮班に配属されていた。新入隊員も朝鮮の日本帰化人ということで、いよいよ内地の出征要員の底をついてきた感じが、死の予感と交錯して、これから先の断末を思わせた。銃後の混迷を推量察知した。しかし彼らも日本兵としての参加に気脈相通するものがあり、誇りもあったように、日本兵としての日常勤務に懸命だった。

ある日突然、部落の裏山台上に中隊全員の集合命令が下った。隊長は畑谷昇治陸軍中尉である。真夏の暑い日で、灼熱のカンカン照りの太陽は、台上周囲のまばら木立から奏する夏蟬の声を耳たぶに焼きつかせた。

中隊全員一五〇名内外だったと思うが、まず祖国日本の宮城に向かって、大元帥陛下に対し奉り最後の最敬礼の「捧げ銃」を畑谷中隊長は宣した。午後三時ころだったと思う。捧げ銃の号令一下右手に支えていた三八式歩兵銃はサッと一斉に各自、体の中心に捧げられた。中隊長の刀は一瞬夏の陽にきらめき、天皇陛下そして祖国日本の安泰たらんことを異国の丘から祈っ

た。立て銃の号令と共に、一元の姿勢に戻り、中隊長を中心にコの字型の隊形となり、中隊長は全隊員に訓示した。中隊長として最後の訓示であった。

「本日、中支派遣軍に対し勅使があつて、勅命が伝えられた。ポツダム宣言の受諾で、これから祖国日本復興のために帰還する。敗戦の事實は各自子々孫々に伝え、捲土重来を期してもらいたい」との趣のもので、劇的瞬間は終わった。中隊長の目は涙で潤み、赤味さえ覚えて兔の眼だった。彼は心で泣いていることを私は伺い知ると同時に、現有残存兵員の無事帰還を祖国に届ける責任と決心に燃え立っていることを知り得た。訓ずるもの、訓を受けるもの、敗戦事實の報知の前にも悲嘆はひとつだった。しかし祖国の実情はいかようにもあれ、望郷の念は何人たりとも等しく、長く離れていた祖国へ帰れる喜び、軍隊という束縛から離れられる解放感もまたひとしおだった。いよいよこの部落ともお別れである。あの部落民ともさようならである。二度とこの土も踏めない捲土重来など夢でしかなかつた。

かくして陣地構築はしないで済み、死を免れ、隊員は勇躍し帰国の第一歩たる集結地鹿角ろくかくに向け出発することとなった。この間一週間程度のものであったと記憶する。私は職務がら部落民とも多数顔見知りになつたので、別れの挨拶に回つた。「開火完了 我們帰国多謝多謝」(戦争は終わつた。われわれは日本へ帰る、ありがとうございました)と。良民は別れを惜しみ、なかには餞別として煙草をくれた者もある。あまり沢山になつたので困るほどだった。送る者、送られる者、どう考えても敵対行為のものではなかつた。なぜこの地に来ての戦闘だったのか、さっぱりその焦点は理解し得ないままでなつていた。ここを故郷として日本へ出征するかのとき印象、錯覚に困惑した。「日本センション(先生)再来」の言葉に我に戻つた。別れは国境、人種を超えて込み上げてくるものである。昭和二十年八月も末、砲中隊は畑中隊長指揮の下、目的地鹿角に向け出発した。三日間の強行軍で、洞庭湖畔の鹿角という人里離れた寒村に着いた。

民家の土間に藁を敷き分隊別の駐留である。中国人

の起居と同じ場所である。中国人の片田舎の起居は、日本人のそれに比べ至極簡便である。土間に寝台を置き、肥え桶かもしくは金たらいをおいてあるだけ、土間のたたきで日本人家屋のように床など張ってある所はない。民家の空いた土間をわれわれが強制接収して藁をしとねとし、着の身着のままのゴロ寝である。

敗戦して食糧その他の現地調達はできなくなった。当地に来て一週間もたつと、いよいよ食糧が枯渇し始めた。炊事担当者は青山忠蔵兵長だった。毎朝起床すると炊事用の薪採りに出掛けねばならない。薪もまばらな禿げ山ばかりで薪を集めるにも苦労する。私も何度か、柴刈りに参加したが往生した。雨に湿った灌木を切り折り取って、どうにか申し訳程度な量にしかならなかったこともある。それでも豆、ニラを入れた混ぜ御飯で、飯粒が全くないということはなかったが、一日二合程度のものだったと思うが、夜になれば腹が空いて、他の民家にねだりに行ったり、農作業の手伝いとして雇われ昼飯を稼いだ連中も沢山いた。

今や事態は逆転し、日本のセンチョンが苦力(人夫)

で、昨日の夢は今日は現実と、一飯の食を求めている労働の提供である。各自その場凌ぎで、どうにか空腹を満たすには事欠かなかったようである。勿論、全体として満腹に至らずとも、どうにか臨機応変の処置で空腹を凌いだ。晴天の日はシラミ取りである。煮沸用のドラム缶で煮てシラミ退治をするのだが、完全というわけにはいかない。

そのうちに食糧事情も中国国民政府の正式支給ということで好転して、その場凌ぎの苦力まで考える必要はなくなつて、自由な束縛なき俘虜生活が始まった。私と一緒に原隊へ入隊した甲種幹部候補生は陸軍中尉となり、私も八月二十日兵長に昇格し、ポツダム伍長として軍籍を終わつた。兵としての軍籍のトンネルを抜け得て安堵した。体の損傷もなく今日まで運び得た奇蹟を謳歌している。危機一髪、戦死の波頭を幾度も幾重も抜けることができたことを人知れず讚じた。

復員業務が今度はアメリカ相手ということで、私は英語の通訳要員に採用され、昨日までの中国語通訳要員は英語通訳要員に転身した。片や中国語、片や英語

という具合で、第百二十連隊内に英語通訳教育隊ができて、毎日私は青山兵長からの飯盒で教育隊通いが始まった。炊事の薪取りは私はしなくてもよくなった。教育隊といっても教室があるというわけではなく、青空教室であった。各中隊から一〇人くらい集まってきたと思うが、最後は三名だけに厳選され、私はその一人だった。一人は東京商大出身の兵隊で、一人は野村上等兵で二世であった。彼はハワイ二世のため英語はペラペラで、師団司令部付きとなって出向していった。「いよいよ私の天下がきた」と彼は喜んでいた。

昭和二十年秋（十一月ごろ）、武装解除の命令が下った。武装解除の数日前、国民政府中国軍官の巡視があるということで、その日、緊張して連隊本部まで蔣介石軍官を迎えにいった。私は連隊本部前で、わが砲中隊巡視の査察官を待った。彼は現出した。彼一人だった。中肉中背で見るからに文人らしく武人の剛々しさはなかった。帽子、洋服、靴にいたるまで、頭の前から爪先まで新品で、階級章は外していたように思われる。編上靴、巻脚絆、すべて日本軍隊用のものである。

暫時一列縦隊で無言のままだったが、寺院前に来たころ突然、背後から私に甲高い声で話しかけてきた。「你有幾年（あなたは中国へ来て何年になりますか）」「我到中国来有五年了（私は中国へ来てから五年になります）」と即座に返答した。振り返りもせず歩いたまま、振り返れば小道のため田圃に落ちてしまうので安心した様子だった。

そのうち砲中隊部落に着き、各班ごとに現在の起居状況を説明案内した。所要時間は三〇分くらいして引き揚げた。連隊本部に帰る彼を部落の端まで見送った。「再見、再見、さようなら、さようなら」と彼は手を振りながら一人で帰っていった。滞りなく国民政府軍の巡察下調べが終わったので安堵した。それから武装解除ということになったが、日本軍隊式の武装解除という厳めしいイメージのものでなく、日本軍隊命令によって、すべての武器弾薬いわゆる武装具を自ら供出するというもので、供出した各中隊の武装具は、全然知らぬ間にどこへか運び去られていった。全くの丸腰になってしまった。

この事実を目の当たりに見、聞き知った部落良民の態度は、やはりいささか変貌した。従来まで決して日本兵には刃向かわなかつた彼らも、罵倒、水を引つ掛けるくらいは朝飯前のことになってしまった。その都度、われわれは臥薪嘗胆してこれに向かうことはできなくなり、ひたすら平身低頭、全くの戦闘能力を失したことを自覚させられた。軍律は丸腰になつても続けられ、復員完了まではと一心に支えられていた。下手すれば帰還できず殺されてしまうのが落ちである。かくなれば早く帰国したい、帰国したいということで、帰国乗船のための出発命令を一日千秋の思いで待った。

昭和二十一年の元旦である。今年こそは帰れると希望を持っていた。乗船名簿の作成も終わり、やがて春が訪れ、机上の私の責任業務も無事終了し連隊本部に提出した。昭和二十一年五月、帰国乗船のための出発命令が下った。そのための最後の身体検査もあつた。天然痘及び疑似者は帰国できないということで、大変心配した隊員もあつたが、天然痘でないことが確定し、

全員勇躍して身の回りの始末に当たつた。約一年間の柵なき集団捕虜生活に終止符が打たれ、中隊ぐるみ、連隊ぐるみ、師団ぐるみで、次の集結地、武昌（武漢の要衝）へと各自、配給を受けた携行の生米、調味料、塩、その他を背負い袋を膨らませ、露営用のテント、針など背負えるだけ背負つての道行きである。

国民政府軍の俘虜生活に入ってから一人の入院者、入室者もなく全員一体となり帰国の途に着くことができた。衡陽作戦で城外で爆弾炸裂のため戦死された大島軍曹、中国大陸に花と散つた数多くの英霊は、今や虚空に變じ、御霊となつてわれわれの隊列に伍しているに違いない。帰る人、あの人、この人の戦闘間、野戦軍隊生活の私のレンズに捉えた青写真は、あたかも走馬燈のごとく展開する。

思えばわれわれ元支那派遣軍百余万人、ほとんどが無傷で、敗戦日本の復興のため帰還し得た事實は、ただ漫然と祖国日本に復員できたものではない。そこには中国軍の蒋介石総統の大慈悲があり、敵としてのわれわれを無事送還してくれた事實こそ、現代中国との

国交回復に当たり反論があったゆえんであろう。当時の俘虜生活を回想し、一兵たりとも一人たりとも、その寛恕さに襟を正さないものはないはずである。もう一カ月、日本のポツダム宣言受諾が遅れたなら、われわれ支那派遣軍、とくに第百十六師団等の損害はますます増大し、私も生還できなかったと思う。お陰でわれわれは生き永らえ、毎年砲中隊全員が集合し、戦友会で美酒を交わすことの幸せをひしひしと感ずるものである。

【解説】

〔第百十六師団略歴〕

昭和十三年
五月十五日 動員下令
五月二十七日 京都において動員完結
六月十九日 支那派遣軍の隷下に入り、大阪
出発
六月二十二日 中華民国江蘇省上海上陸
六月二十五日 浙江省杭州移駐、杭州付近の警備。

九月十三日 安徽省安慶移動、揚子江沿岸の警備

十月十六日 漢口攻略戦、歩兵第百十九旅団

(歩兵第百二十連隊、歩兵第百三十三連隊)は蕪春付近上陸、黄白城付近戦闘を経て漢口の攻撃に参加

十一月五日 原所屬に復帰

十二月八日 大通南方地区作戦

昭和十四年

十二月十六日 揚子江岸冬期作戦。

昭和十五年

四月四日 春季皖南作戦

五月七日 湖東作戦

十月十五日 秋季皖北作戦

十一月二十五日 北方瀋陽作戦

昭和十六年

十二月二十四日 皖浙作戦

昭和十七年

四月三十日 浙贛作戰

十二月二十一日 大別山作戰

昭和十八年

十月五日 常德作戰

昭和十九年

一月十日 湖北省武昌駐留

二月十日 戰鬪序列をもって第十一軍の隸下

に入らしめらる

四月二十日 湘桂作戰

十月三日 湖南省宝慶駐留

十二月一日 戰鬪序列をもって第二十軍の隸下

に入らしめらる

昭和二十年

四月一日 湘西作戰（芷江作戰）。第二十軍の

実施せる本作戦の中核兵団として

参加し、雪峯山系を突破し、沅江

河畔を指呼の間に収めたるも、五

月上旬反転を命ぜられ追隨せる十

数倍の敵の重囲を克く撃破、戦場

八月十六日 停戦の大詔を拝受し、同日戦鬪行

動を停止す

八月二十五日 復員下令

十月一日 湖南省岳陽縣孫武村近集結

十月四日 武装解除

昭和二十一年

四月二十九日 内地帰還のため孫武出發

六月六日 上海到着

六月二十八日 上海出發

(一部二十一年六月二十日 上海出發)

七月六日 浦賀上陸

(一部七月十五日、佐世保上陸)

七月二十五日 復員完結

(歩兵第百二十連隊略歴)

昭和十三年

五月十八日 編成下令

連隊長 陸軍中佐 志摩源吉

五月二十三日 軍旗拝受

五月二十四日 福知山において編成完結

六月 上海上陸

六月三十日 湖州付近警備

十月一日 武漢攻略作戦参加

十一月二十六日 順安攻略作戦参加

二十九日 銅陵付近警備

十二月七日 大通南方地区作戦参加

昭和十四年

二月一日 安慶付近警備

三月一日 湖口付近警備

四月十六日 安慶付近警備

十二月三十一日 貴池作戦参加

昭和十五年

四月十九日 春季皖南作戦参加

五月十五日 湖東作戦参加

十月三日 秋季皖南作戦参加

十一月二十一日 北部潯陽作戦参加

昭和十六年

一月十五日 東流付近警備

五月十八日 石門街作戦参加

昭和十七年五月 安慶周辺地区反撃戦闘参加。一部は師団主力と共に浙贛作戦参加、この間来襲せる第五戦区の敵に対し反撃。

十一月九日 池州付近警備

十二月二十一日 大別山作戦参加

十一月九日 池州付近警備

十一月九日 池州付近警備

十二月二十一日 大別山作戦参加

昭和十八年

七月十八日 常德作戦参加

昭和十九年

一月十一日 武昌周辺地区集結

四月二十日 湘桂作戦参加

十月九日 湖南省邵陽県付近警備

昭和二十年

一月 安仁付近警備

四月一日 湖西作戦参加

六月十日 寶県付近警備

九月一日 鹿角付近移駐、行動開始

九月三十日

湖南省岳陽鹿角付近移駐

昭和二十一年

五月九日

漢口移駐

六月四日

上海移駐

八月二日

復員完結

大東亜戦争従軍懐古談

愛媛県 野田忠雄

私は昭和十二年度徴集兵です。私の軍人としての略歴は大略次のとおりです。

(一) 昭和十四年五月十日第一補充兵で善通寺輜重兵第十一連隊へ入隊、六月十日召集解除。

(二) 昭和十四年十一月三日再び善通寺へ応召し、十一月十四日香川県坂出港より乗船、中支派遣軍へ出征。支那湖北省咸寧県政府城内で第一野戦病院開設、行李班へ編入。中支派遣軍第四十師団第一野戦病院付行李班(天谷部隊高野部隊行李班)で

す。

防諜名は鯨第六八九二部隊でした。

昭和十七年十一月三日、上海呉淞第一鉄道棧橋より乗船、十一月十四日善通寺輜重兵連隊で召集解除。

(三) 最後は昭和二十年四月二十日剣山第〇〇部隊野戦病院付き行李班へ応召、九月二日召集解除復員。参加した主要作戦は三回で、

1. 宜昌作戦

2. 第一次長沙作戦

3. 第二次長沙作戦

でした。

昭和十四年五月の最初の応召のとき、住居は現在と同じで、家業は陶器、土器、土管類の製造販売。

家族は、

祖母 健在(隠居)

父母 ” ”

兄弟姉妹 ” 六人

九人で私は長男(当時二十四歳)です。